

場所や風景がもつ暴力について考える

事件が起きた場所に認られる“共通の風景”を指摘

好井裕明

日常的風景。それはまさに毎日あたりまえのように経験しているがゆえに、それ自身問題をほらんだものとして私たちの前に立ち現われてくることはない。しかしもし、さまざまな社会問題や他者との軋轢や葛藤をめぐるような現象の生起と風景が関係しているとすれば、風景が私たちに働きかけてくる力とは、いつどのようなものなのだろか。ひとをいじめたり、ひどをあやめたりするのは、心理的動機や人間関係の問題ではなく、彼らが生きていることで意味を与えていた。その

としたら。風景と社会問題との関連性という著者独自の関心から、本書では「いじめ自殺を生む風景」の特徴が見出され、「開発空間の暴力」が語られるのである。

太平洋戦敗戦後、かつて軍用地として使われていた多くの土地が「空地」となる。そこは管理されることはない、荒廃していたという。山林、河川、木造家屋、旧商店街、神社仏閣、墓地などはこれらは共通して「脱中心化する風景」であるという。農地や

いじめ自殺が場所や風景があるいは名状しがたい力を論じていくのである。

いじめ自殺を生む風景。それは、そうした新たな中心も存在せず、自然素材の風景と化された風景が統一される。これは共通して「脱中心化する風景」である。農地や山林、河川、木造家屋、旧商店街、神社仏閣、墓地などはこれらが空間の自然さをつくっている。このように書いてみると、固有の意味が閉じ込められ、その意味が日常的風景として私たちにある力を行使し、私たちは日常、そのよ

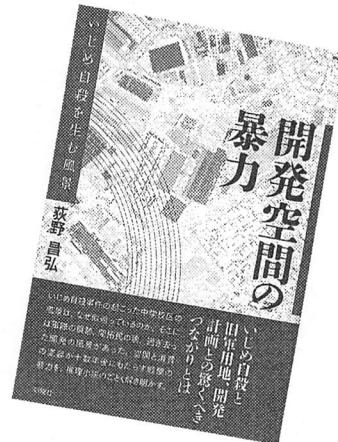
うな力の行使を感じることも感じないかもしない。しかし、あまりアリティを感じないかもしない。しかしながら、「周辺化」していく風景として私たちにある力を行使し、私たちは日常、そのよ

荻野昌弘 著
▶開発空間の暴力

いじめ自殺を生む風景

3・20刊 四六判256頁 本体2600円

新曜社



後「開拓」が飽和状態になつた頃から、土地は日本の高度経済成長の流れのなかで、工場や団地として「開拓」されしていくのである。そして著者はこれまでのいじめ自殺事件を調べ、その多くがかつて旧軍用地であり、「開拓」された場所で生きていたといいう事實をあげ、その一つ二つの風景の特徴を述べていくの

だ。個別のいじめ殺人事件で、事件にかかわる人々の生活や動機、感情などを検討するのではない。ただ事件が起つた場所に認められる「共通の風景」を指摘し、その風景が、そこには現出しているのである。大都市空間では、

化学化された素材が駆使され、新たに化学化された中心が創造されていくだろう。化学化といいやおうない過程でのなかで、私たちの暮らしや意味も化学的なものへと収斂されていったはずだ。しかし、「脱中心化する風景」では、いじめ自殺が場所や風景がもつ暴力について考える

著者が主張する場所や風景と小説作家の次の作品を中心とするという気分で、今後の学の意義は、充分にあるのだ。ただ本書では、その論証はまだ未完成と言わざ

るを得ない。何か好きな推理小説家の次の作品を中心とするという気分で、今後の展開を楽しみにしたい。(日本大学文理学部教授)